

---

# 灰になった英雄

T A

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

灰になった英雄

### 【Nコード】

N8759B

### 【作者名】

TA

### 【あらすじ】

八年前、どん底に落ちた『英雄』が、大切なものを取り戻すために足掻くストーリー。

## 序章

目の前の化物は、これまでに戦ってきた何よりも強大で絶望的な力を持っていた。

血の滲むような努力で体得した幾百かの魔術は全くの無力であり、並ぶ者無しと評された絶大なる魔力は何の役にも立たないと判断せざるを得ないだろう。

目がかすれる。自分が今どんな状態なのかもわからなかったが、感覚の絶えた全身は正常ではないことは確かだ。

「……ン！ レン！！ 生きてる！？」

レンと呼ばれた男は、薄れゆく意識の中で彼女　　ミリアの声を聞く。

金髪をボブカットにした彼女は全身傷だらけで息も絶え絶えだったが、その蓮の花を散らしたような美貌と意思のこもった瞳の輝きは少しもくすんではいなかった。

自分がこんな情けない状態だというのに、彼女は未だ剣を握り戦い続けていたのだ。

だが国王陛下から授かったその美しい裝飾剣も、今や自らの血で見る影もなく汚れてしまっている。

「逃げる。こいつには敵わない」

自分でも驚くほどのか細い声だった。

「あんた置いて逃げられるわけないでしょ！」

そう彼女が言い放った次の瞬間、手にしていた剣は化物に弾かれ宙へと舞う。

「……ッ！」

苦虫をダース単位で噛み潰したかのような顔で舌を打つミリア。

特に笑みを浮かべるでもなく　その仮面をつけたかのように固い顔面に表情筋があるのかは疑問だったが　化物は剣を弾いたのとは逆の手で今度は彼女そのものを殴り飛ばす。情けや容赦など欠

片もない。あるのは表情に表れずとも悟れる明確な殺意だけだった。悲鳴を上げる暇もなく、ミリアは突風で浮かび上がった紙切れのように吹き飛ばされ、石壁へと叩き付けられた。そのままずるずると床に滑り落ちて行き、ついにはレンと並んでぐったりとうなだれる。

「ミリ、ア……今、助ける」

ほとんどかすれて聞こえない声でそう言いながら、レンは苦しげな表情のまま右掌を敵に向け、頭の中で素早く術式を展開させる。だがたとえいかなる魔術を展開したとしても、トリガー・ワードを発しなければ話にならない。レンはなおもかすれ続ける声でその言葉を唱え終え、どうにか術を発動に持っっていた。

極めて高度な式を利用した、通常の術師では及びもつかないようなレベルの魔術だ。発動した術式は敵の能面のような頭に白い光の楔を穿ち、続いて巨大な体躯のあちこちに次々と同じような楔を打ち立てていった。

だが

通常弾けて対象を消滅させるそれらの楔は、その役目を果たすことなく虚空へと立ち消えた。

まただ。この化物は先ほどからこちらの術をすべて途中で強制終了させてしまい、おまけに手傷を負わせても数分と待たず見る目に修復していく。

こいつを倒し、長かった戦争を夜明けに導く？

できる筈がない。この国は明るくなりかかった夜のまま時を止め、もはや日の出を迎えることは無いだろう。

「この力。人間風情には過ぎた力だ」

不意に、それまでほとんどしゃべることのなかった化物が意外にまともなバリトンで吹き、レンに向かって彼の頭以上もある掌をかざす。

瞬間、レンはまるで自らの身体が数十年分老化したかのような虚脱感に襲われた。自分の中にある根源的な何か　魂や精神力

それらの一切合財が奪われていく。艶やかな黒だった髪も色を落としていき、次第に薄いグレーへと変色していった。

「レン!!!」

どこにそんな力が残っていたのか、ミアアは子をハイエナに襲われた雌獅子のように猛然と化物につかみかかり、腰に下げていたさやかな短刀で斬りつける。だが化物は薄い鉄の刃などものともしない。

彼女もレンと同じく超人的な技能を持つ剣士だったが、この強大な敵の前ではまた等しく無力だった。

それでも、彼女は諦めない。

追い詰められた鼠が猫を噛む　そんな言葉では説明のつかない必死の抵抗の末、ついに彼女はレンを化物から引き離すことに成功した。

それでもなお迫り来る化物相手に、彼女は決して諦めることなく、先ほど弾かれ地面に突き刺さっていた剣を引き抜いて抵抗を続ける。剣姫という二つ名に相応しい……いや、それ以上の勇敢さで。

レンはその様子を、どこか遠くの国の舞台でも見ているかのような心地で眺めていた。

美しい。死の淵で、ただそう思った。

そのまま舞台は大きな、とてつもなく大きな白い光に包まれていく。

光が明けるのを見ることなく、レンの意識は深い闇に落ちていった。

## 第一章

「素晴らしい大きな大都会・ミラ！ 夢にまで見た街並み！ 私は、ついに！！ たどり着いたんだわ！！」

しっとりとした黒髪に、辺境の民族衣装を纏った小柄な少女が、両手を天に上げ目を燦然と輝かせる。

どこか獅子を思い起こすしなやかな肢体に、意思の強そうな眉目。成長すればさぞや驚きの美女になるであろうことは想像に難くない。そんな少女だ。

その少女によって臆面もなく叫び散らされた言葉の残響が朝もやを纏う倉庫街にこだましているうちに、少女はがらりと陰気な顔になって後ろを振り返りつつこう言った。

「だってのに なんなの、あんたらは？」

心底迷惑そうに言った少女の眼前には、四人のいかつい大男が立っていた。

揃いも揃って見事なまでに悪人ヅラ。僕たち、悪いことしてます！というオーラがゆらゆらと立ち上っている。

「なめてんのか、お前は」

リーダー格と思しき男が一步前を出て、たつぷりの凄味を見せて言い放つ。

無理もない。大の男が四人で少女を暗い路地に追い込んでいるというのに、こんな反応をされたらそう言いたくもなるだろう。だが男の発言にはまったく動じず、少女はなおもうんざりしながら、

「ハア……まさか初日にしてウワサに聞く“都会のキナ臭さ”を見るハメになるとは。ってかあんたら、どっちかと言うとゴミ臭いんだけど。ちゃんと毎日風呂入ってんの？」

鼻を押さつつ、目尻には涙さえ浮かべてそう言った。

少女の言葉に白目をピンク色に染めて激昂したリーダー格は「このクソガキ……！」と小さく呟くと少女の顔面に容赦呵責の無い右

ストリートを放つ。その様子をどこか面倒くさそうに見ながら、少女はすばやく右手で男の手を掴んで攻撃を止め、右足でリーダー格の腹を蹴り飛ばした。

衝突の瞬間、少女の足首に彫られた刺青がわずかに光り

その光が消える頃には、男の体は轟音を立てて向かいの壁に叩きつけられていた。

「な……!？」

残った三人は狼狽を顕わにし、驚きの目で少女を見やる。

「まだやるってんなら相手になるわよ。かかってらっしゃい。全員まとめて、このマコト様の築くサクセス・ストーリーの栄えある一ページ目に載せてあげるわ!」

まっすぐに男たちを見据え、自信たっぷりな少女　マコトは言い放つ。

「ッ!!　覚えてやがれ!」

古今東西、チンピラ共通の陳腐な捨て台詞を残し男達は去っていた。

「つまんないわねえ……」

今までと打って変わり静寂に包まれたミラの路地裏で、マコトはそっと呟いた。

本当なら、あとの三人もぶっ飛ばしてやるつもりだったのだが。都会のチンピラはなんて根性ナシなのだろう。

長い船旅で疲れた三半規管と運動不足でのストレスを解消する絶好のチャンスだったのに……!

身勝手なことを考えながら、マコトは暴れて着崩れした民族衣装をそそくさと直し、その場を後にした。

大都会・ミラ。大陸の東南に位置するこの街は、「魔導革命」によって急速に発展した都市である。

八年前の、勝ちを見越して仕掛けた戦争に敗北したことによってこの国には重度の経済危機が訪れた。

それを乗り切るために国がとった政策は、今までごく限られた人間にしか使うことのできなかつた魔術という力を誰にでも簡単に使うことのできるようにする。そんな技術の開発を推し進めるといふもの。

成功すれば国内の生活が豊かになることはもちろん、諸外国への強力な交渉材料にもなる。国はこのために膨大な額の予算を立て、果ては今まで一般には公開しなかつた魔力や魔術の理論を提供することも惜しまなかつた。

やがてそんな国の思惑が実を結び、前述した「魔導革命」という革新的な技術の進歩が巻き起こる。

例えば、感応石という特殊な鉱物を反応させることで魔力を発生させそれをさらに応用させやすいエネルギー、すなわち電気に変える「魔力発電」。これによってそれまで火に頼っていた明かりは電灯に変わり、また数々の電気を動力とする機械が作られることになった。

ミラはその感応石を産出する鉱山街であつたため真つ先にその技術が導入され、結果その技術の先駆者たるこの街には人・資源・物資、ありとあらゆる物が集まり、ついには大都市と呼ばれるに至つた。

だが急速に発展した一方で、旧市街地である鉱山付近は未だに未整備なままであつたりする。

そこにうっかり足を踏み入れると、先刻のマコトのような目に遭うことになるというわけだ。

「なるほどね、うっかりしてたわ」

左手に地元案内のパンフレット、右手にフォークという行儀の悪い格好で食堂の隅に座っていたマコトが口の中のポークソテーを飲みきらぬうちにそう一人ごちた。

ここはミラの中心街に位置する大衆食堂だ。昼飯時なので、店内

は非常に混み合っている。

マコトは空腹を訴える身体を落ち着かせるため、適当に当たりをつけて店に入った。

その入り口付近に無料で、という触れ込みで件のパンフレットがあったため、昼食がてら読みふけていたというわけである。

極東の田舎出身の彼女は、この国の現状をよく知らない。

事実、そこではまだ魔導革命の余波すら来ていないし、もちろん明かりは火に頼るしかなかった。

まあそういうところはそういうところなりの魔術体系の進化というものがあるのだが、それは後にしよう。

とにもかくにも　マコトはこの国では珍しいほどの世間知らずと言えた。

最も、ミラが誇る最先端技術についての知識はその限りではない。なにしろ彼女がこの地を最初の目的地としたのは、その技術に対する強い憧れからくるものだったからだ。辺境の田舎に伝わってくる情報がどこまで正確かはともかくとして。

(さて、と)

米粒一つ残すことなく食事を平らげたマコトは、料金を支払うべく店のカウンターへ向かう。伝票を差し出すと、頭に三角巾を巻きつけた初老の女店主は柔和な笑みで料金を告げた。

「1300ディネロになります」

マコトは黙って財布から金を差し出し、そのまま店を後にしようとする。

「ちよつと！　なんだいこりゃ？」

店の扉に手をかけていたマコトを、初老の女店主　改め、性格に難がありそうなおばちゃん怒声が止めた。

「なにつて……お金だけど？」

「こんな金、使えないよ。出すならこれじゃないと！」

そう言っておばちゃんが取り出したのは、マコトには見覚えのない黄金色の硬貨だった。

マコトがよく知る金というのは銅と銀を混ぜた薄汚い大判で、事実今もそれを出した。それでもマコトの住んでいた地方では大層な価値があるもので、それさえ出せば大概の物は購入できたハズだったのだが……

「えー……なにか、不幸な行き違いがあったようで……」

どうやら世間知らずな自分はまた何かミスを侵したらしい。そう悟ったマコトは、脂汗を浮かべながら一歩二歩と後ずさる。

「タダ食いは許さないよ。気の毒だけど、自警隊に通報させてもらうからね」

情け容赦のまったく感じられない鋭い眼光で、おばちゃんはい言放つ。

まずいことになった。そんな自分の置かれた状況に混乱しながらも、なにか言い訳を考えていると

「まあ、そう睨みつけないでくれ。金なら俺が払ってやる」

横で見ていた灰色髪の男が、優雅と形容しても差し支えない動作ですっと立ち上がり、二人の間に割って入ってそう言った。

丸涸の眼鏡に使い古したロングコート。マコトよりは相当年上に見えるが目鼻立ちを整っていて、まず美形に分類しても問題ないように思える相貌。

だがそんなこととは関係なく、マコトにはまさしく彼が救いの神であるように感じられた。まったく大げさだが。

今なら男の後ろに後光が差しているとしても本気で錯覚しかねない勢いである。

「あらそう。お人よしだねアンタ。そこの世間知らず娘は命拾いたね！」

おばちゃんは厳しく言い放つと、ちょうど入ってきたお客に見事な笑みでいらっしやいませ！と頭を下げた。

その見事な転身を横目に見ながら、何か釈然としない気持ちを押しさえつつマコトと男は店を出る。

「お前、新聞読まなかったのか？」

外へ出るなり、男が半ば呆れた口調で言った。  
「新聞？」

「大戦後からこの地域じゃ旧貨は使えなくなつたんだ。旧貨は加工技術が荒くて偽造し放題の上、敗戦で価値が著しく下がったからなお前、この国のモンじゃないのか？」

「一応国境ギリギリだけど……こつからずいぶん東の、ヒノつてところからきたの」

「ああ、ド田舎だな。そりゃしょうがないか」

はつきり言つて腹が立つ言い草だったが、助けてもらった以上何も言つことはできない。

「とにかく、ありがとね。でもなんで助けてくれたの？」

「……気まぐれだよ」

男は少し間を空けてそう言った。

その一瞬の間にマコトは少しばかり興味を引かれたが、男が足早にその場を立ち去つてしまつたために、何がそうさせたのかを確認することはできなかつた。

\*

「で、襲つハズの女の子に吹っ飛ばされて、怖くなつて逃げてきたと？」

鉦山街の奥の奥、街のチンピラが一同に会する集会所。

さして広くもない空間だったが、薄明かりに照らされたその部屋は見るものを慄然とさせる不気味さに満ち溢れていた。

その中心で、さながら辺境に住まう魔王の如く威厳十分に腕を組み椅子に座っている大男 旧市街の長、ガガラはマコトから逃げ帰つた四人組の話を聞いてこめかみを引きつかせながらゆっくりとそう言った。

「あ、いえ。吹っ飛ばされたのは俺らではなくて……」

筋骨隆々の浅黒い肌に、弁髪を肩まで垂らしたその姿はチンピラ

のボスというよりは熟練の武道家を思わせる。そんな容貌のガガラに睨み付けられれば無理のないことだったが、四人組は揃って縮こまり言い訳じみた釈明をした。

「そんなことはどうでもいいんだよ。問題は面子だ。その女にこのことを言いふらされたら、いい笑いモンだ。ついで市街地の自警隊がこちらを甘く見てさらにシマを広げるかもしれねえ。そうなら……？」

「ここで好き勝手できなくなりますね」

「わかつてるならさっさとその女を捜して今度こそムイてこい！手段と人数は選ぶな。手の空いたやつを全員連れて行け！」

「はい！」

四人の男は滲んだ脂汗を拭い去ることもなく、小走りにその場を去っていった。

(まったく……)

ガガラはズボンのポケットからタバコを取り出し、マッチを擦って火を点けゆるりと紫煙をくゆらせた。

こんな調子では、市街地まで乗り出すことなどまだまだできないだろう。

いつまでも旧市街地でお山の大将に収まっているつもりはない。自分はさらに上へ行く。

そして、心身尽くして戦った恩を仇で返した国に復讐を遂げる。そのためには目先の問題を解決しなければならない。

(ゆっくりと、確実にだ)

ガガラは目の中に静かな野心を灯らせ、二本目のタバコに火を点けた。

\*

同日、夕刻。

露商が店じまいを始め、人込みもまばらになったミラの中心街を、

マコトはとぼとぼと一人で歩いていった。

暗くなりかけの街には、早々と電灯に明かりが点り始める。その火とも魔術の明かりとも違う不思議な温かさにマコトは感嘆したが、そんな思いもすぐに立ち消えた。

今日はどうにもツイていない。

朝っぱらから路地に迷い込んでチンピラに襲われるわ、昼間は世間知らずっぷりを露呈するわ。

せつかくどうにかあの辺境を出てきたのに、これではあんまりだ。それに今晚の宿も保障はできない。なにせ使える金がないのだから。

「ふう………」

溜息とともにそれらの考えを頭の隅に追いやって、マコトは歩き続ける。歩いていけば、何もしないで立ち止まっているよりは状況が改善に向かう。これは彼女の持論だった。

そのまま、三十分ほど歩き続けたところで、彼女はたと足を止める。

妙な違和感があった。考えごとをしながら歩いていたせいで気付かなかつたが、先ほどから選択肢はたくさんあつたはずなのに人為的に一つのルートを辿らされている。

確信に近い疑念がマコトの頭を渦巻いた。こんなことをする連中にはあのチンピラ達ぐらいしか心当たりが無い。恐らく行き着く先には今朝の数倍のゴミ臭いおっさん達が待ち構えているのだろう。

（リベンジってこと？ 上等じゃない。あたしは今、無性に誰かをぶつとばしたいのよ………！）

顔の端をにやりと吊り上げ、舌なめずりをするマコト。その所業は彼女の気分的には野ウサギ狩りと大差が無かった。

ストレス解消という大義名分の下に罫にはまったふりをすることに決めたマコトは、行く道に徐々に人気が無くなっていくのもお構いなしにずんずんと大股歩きで進んでいく。

そうしてさらに三十分。足元は石畳で整備された道ではなく、今

朝と同じ荒れた道へと変わっていた。

いつのまにか鉾山街の方まで来ていたらしい。ここまで来れば十分だった。

「いるんでしょう？ 今朝のゴミ臭いおっさん達。相手になるわ。出てきなさい！」

彼女なりにたっぷりとドスを効かせて言ってみるも、一向に相手は現れない。

(……？ 怖気づいたのかしら)

そう思っていると、不意に彼女の鼻腔を甘い香りがくすぐっていく。

「ん……マズイ、こ……れ……」

気付いた時には、辺りは一面睡眠作用のある煙で満たされていた。どうにもならない。マコトは塩をかけられたナメクジのように全身の力が抜けていくのを感じながら、ゆっくりと地面に突っ伏し、そのまま気を失った。

意識を取り戻したと同時に、マコトは両手両足を縛る鉄の感触を感じた。

「ご丁寧に鎖でがんじがらめにしてある。これでは到底抜け出すことなどできない。」

マコトは先刻チンピラを吹っ飛ばした、両手首に刻まれた刺青を介して発動する魔術を修めている。だがこれはただ単純に筋力を増加する類ではなく、腕や足を振るって対象に当て、その際に初めて発動する言わば「ふつとばし専門」の術だった。速度が増せば増すほど乗数的に威力は上がっていくが、まったく身体を動かせない。つまり速度がゼロの状態では何の効用も及ばさないというわけだ。

ヒノ出身ならば、この術を使える者は珍しくない。魔導革命の遙

か以前から、マコトの故郷である辺境ではこうした『魔術を誰にでも使えるようにする』術が考え尽くされてきたのである。

おそらく敵はどこかでこの術を見たことがあり、かつそれによって特性を把握した上でこのように縛っているのだろう。

(油断した……！)

打つ手が無い。マコトは背中がじつとりと汗で濡れるのを嫌が応にも感じずにはいらなかった。

彼女の“とっておき”もこの状態では使用不能だ。偶然のことだが、これも痛かった。

「目が覚めたか」

暗闇の奥で低い男の声が聞こえると、同時に部屋に明かりが点る。ここまでは電線も引かれていないのかその明かりは従来通りの火によるものだったが、それが返って映し出された十数人の男の姿を不気味に見せていた。

思ったより狭い部屋だ。男たちは壁際に縛られたマコトを囲んで、みな一様ににやにや笑いを顔に貼り付けていた。

「部下相手に派手に暴れたらしいな。だがそう縛られたら動けんだろう。前線に昔いたよ。ヒノ出身でお前と似たような刺青を持った傭兵が。戦争もたまには役に立つ」

弁髪の大男　ガガラはそう言うのと、哀れみを込めた目でマコトを一瞥する。

「かわいそうだが、女子供になめられたらせつかくこつこつと市街地の連中に植えつけた恐怖が台無しだ。お前はこいつらに好きにさせた後、海に捨てさせてもらう」

「ちよっ……勘弁してよ！！ 私まだ16よ!？」

マコトはろくに動かせない両手足をガンガンと壁にぶつけて抗議した。

「だからまずいんだ。気の毒だが仕方がない。……おい」

ガガラはそう言って、マコトに一番近い男に目で合図をする。

男はそれを受け取って、マコトの衣服にゆっくりと手を伸ばした。

「えっ？ちよつとウソでしょ！？ やめて離して！ この腐れチンピラ！ レイパー！ 戦犯ー！！」

必死になって抵抗するマコトを煙たそうにしながら、いよいよ男が衣服を剥ごうとしたまさにその時。

部屋の中心の空間　ちよつと男たちの頭上　に突如幾何学模様を刻んだ拳大の赤い魔方陣が現れ、そこから溢れんばかりの眩い閃光が迸った。

「ッ！　なんだ！！」

男たちは狼狽を頭にし、マコトの衣服を剥ぎにかかっていた男も手で目を覆う。

中には足をつまずき転ぶものもいて、その不幸は連鎖反应的に周りの男たちにも降りかかった。

さして大きく無い部屋に大量に人間が密集していたため、場は大混乱だ。

「全員、こちらを向け」

閃光が止んでなお混乱の只中にある部屋に、男のするどい声が凜と響く。

チンピラ達は声のする方を一斉に振り返り、そのまま絶句した。

そこには、灰色髪の男に二丁の銃を突きつけられている彼らのボスがいたからだ。

「まずその女を放してやれ。顔見知りだ。そうされていると寝覚めが悪い」

ガガラに銃を突きつけたまま、灰色髪の男がしれつと言った。

（顔見知り？）

そう言われたマコトは男の顔を凝視して、目に映った姿に小さな驚きを覚える。

その男は、昼間自分を助けてくれたあの灰色髪の男だった。だが一体、何故ここに？

手近にいたチンピラに鎖から解き放たれ、痺れた両手を何度か握り直しながらもマコトは怪訝に思ったが、この場の空気が気安くそ

れを質問することを許さなかった。

「さてアンタ。単刀直入に聞くが……“ノイズ”はどこだ？」

「聞いたことがない単語だな」

灰色髪に問われたガガラは、そ知らぬ声でそう答える。

「知っているはずだ。この旧市街を仕切るアンタなら」

ガガラの後頭部に銃をぎりぎり押し付けながら、低いトーンで男は言った。

それを見たチンピラ達は全身で威嚇しながらじりじりとにじり寄ってくるが、ガガラの観念したような「やめる」という声で動きを止める。

「あれは地下にある。この街は変わったが、地下の道は変わっていない。発電施設の地下が探し物の場所だ」

こんな状況でも、ガガラはしっかりと口ぶりでそう言った。

灰色髪は真意を押し量るようにガガラの瞳を見据えたが、やがて銃をガガラに向けたままゆっくりとマコトのほうへ歩き出す。

そしてマコトの側までくると、無言で引き金に力を込めた。

ガガラは思わず身をすくめたが、弾丸は飛んではこず 代わりに空中に出現した三つの魔方陣がまぶしく光り、次の瞬間には灰色髪とマコトは霞のごとく忽然と消え去っていた。

その場に残されたのは、未だに身をすくめたままのガガラと間抜けな顔をして立ち尽くすチンピラ達だけだ。

「頭……あいつは一体？」

チンピラの一人が口を開く。

「わからねえ。だがそれ以上に……“ノイズ”だと？そんなものに一体何の用があるってんだ？」

\*

気が付くと、マコトはミラが見下ろせる小高い丘の上で寝そべっていた。

「あれ？ 私……」

思わず呟いて周りを見渡したマコトの目が、こちらを覗きこんでいた灰色髪の男と合った。

「気付いたか」

灰色髪は無愛想にそれだけ言う。

「さっきのも今のも……魔術？ 都会の魔術はこんなこともできるのね。ってその前に何で助けてくれたの？」

「あー。前者はイエスだ。少々特殊だが、こいつは魔術だな」

そう言っつて、灰色髪は先刻ガガラに突きつけていた二丁の銃を掲げてみせる。どうやらこれが術の発動媒体らしい。

「後者は……悪いが偶然だよ。あいつに聞きたいことがあったから出向いたら、なにやら騒がしかったんで様子を伺ってみると見知った顔がひんむかれそうになっていた。それで助けたただけだ」

「そう。理由はどうあれ助かったわ。ありがとう」

マコトは深いお辞儀とともにそう言う。心からの感謝だった。

「いいさ別に。ではもう行くぞ」

そのまま立ち去ろうとする灰色髪の右手を、マコトはあわてて掴んで止める。

「待つて。気まぐれと偶然でも、二度も助けられて何もしないなんて私が許しても後世に私のサクセス・ストーリーを読む大衆が許さないわ！ 探し物がどうか言っつてたわよね？ 手伝わせて！」

無茶苦茶なことを言い出すマコトの剣幕に若干気圧されながらも、灰色髪はしつかりと首を横に振る。

「すまないが、俺の探し物は只の女の子に手伝える代物じゃないんでな。気持ちだけ受け取っておく」

「そう言っつと思っつてたけど、生憎と私は只の女の子じゃないのよね」  
言いながら、マコトはつかつかと傍にそびえていた大木まで歩いていく。そしてゆっくりと目を閉じ、右手を垂直に構え 見開いた目と共に、渾身の一撃を放つ。

右手首の刺青が眩く光り、凄まじい轟音と共に大木は筆でも折つ

たかのごとく真っ二つになぎ倒された。

「どっ？」

土ぼこりを背に、マコトは不敵に微笑む。

「お前、こりゃ……魔術じゃねえか」

「私の田舎じゃ結構ありふれてるわよ。まあ、私のは他の人よりちよこつとばかし強いみたいだけど」

その『ちよこつとばかし』というのは、マコトの才能の成せる技であった。辺境の技術であるこの刺青は、元より自己に存在する魔力を外側へ放出するための言わば『蛇口』の役割を持っている。蛇口をひねってでる水の量や勢いは、各々にある才能次第というわけだ。

「ああ、そういえばヒノ出身だって言ってたか。噂には聞いてたが……実際に見るのは初めてだ」

灰色髪はなにやらしばし黙考した後、マコトの目をゆっくりと見据え口を開いた。

「いいだろう。手伝ってもらおうよ。お前、名前は？」

「マコト。マコト・イザナミ」

「……グレイ。グレイ・ステイウッドだ」

灰色髪の男、グレイがすつと右手を差し出し、マコトもそれに応じる。

いつのまにか日は没していたが、二人のいる丘は眼下のミラに照らされて淡い光を湛えたままだった。

## 第二章

「で？　なんでお前は俺のホテルの前まで付いてきてるのかな」

「それはその……世の中にはお金がなくて泊まるところがなかったり、今の季節に野宿はさすがにきつかったり、寝てる間にまた鎖でがんじがらめにされたら困るとかそういう壮大な理由の元にわずかなつてを頼る少女もいたりするわけで……」

ミラの中心からやや外れた、簡素な宿街。

ここには日雇いの労働者が寝るところだけを求めて泊まる格安の宿から、旅行者が使う一般クラスまでの宿が所狭しとひしめき合っている。

その一角で、灰色髪の男と見慣れない民族衣装を纏う少女が立ち止まって話し込んでいた。

言うまでもなく、マコトとグレイである。

「要するに、俺の部屋に泊めてほしいと」

「まあ、そういうことになるわね」

「何が“助けになりたい”なんだか？」

「それを言われると物凄く心苦しいけど……さっきも言ったように背に腹は変えられないというかなんというかなのよ。お願い！　泊めて！」

両手を合わせて懇願。体面もクソもないといった風である。

グレイはその様子に小さく溜息をついて、やがて観念したように口を開いた。

「仕方ない。泊めてやるよ。だがもちろんタダってわけにはいかな  
いぞ」

「うっ……やっぱりそうくる？　そうよね……私かわいいし。あなたなんだか飢えてそうだし。でもこんな形で失うのも悲しいという  
か。でも若干興味はあるというか。うー」

そんなことをぶつぶつ言い出すマコトに、グレイはだまって肩に

下げていた荷物をぽんと手渡す。

「何と勘違いしてるか知らんが、この中の洗濯物を頼む。ついでにこの紙に書いてあるものも買い出してきてくれ」

「はい？」

予想だにしないグレイの物言いに、マコトは間の抜けた返事をする。

「これだけありや足りるだろ。ああ、ルームナンバーは302号室だ。先に行って休んでるからとりあえず買出しよろしくな」

古びたがまぐち式の財布を手渡し、グレイはさっさと部屋に上がっていつてしまった。

「……。この屈辱は私のサクセス・ストーリーには載せないでおくわ」

小さく呟いて、マコトはまだ開いている店までそそくさと出かけていった。

両手に抱き抱える紙袋に視界を遮られながら、マコトは302号室の戸を叩く。

程なく、がちやりと鍵の回る音がして内向きに戸が開き、眼鏡を外したグレイが顔を出した。

「遅かったな。世間知らずには少し厳しいおつかいだったか？」

「ええまったく。おかげで色々と社会勉強になったわ」

マコトは言いながら部屋の中央まで歩いていき、乱雑に何かの資料が重なっている机の一角に買い出した荷を下ろす。その横に、肩に下げていた下の共用洗濯場で手洗いしてきた洗濯物の入った鞆をどざりと置いてから、大きく伸びをしてソファアに腰を下ろした。

「その武勇伝を語りたところだけど、それは後に出版される私の

サクセス・ストーリー本を読んでちょうだい」

「気長に待つてるよ」

適当な相槌を打って、グレイはマコトが買い出した品物をがさごそと漁り始める。

縄で縛られたハムとワイン、それにあらかじめ六等分されたチーズ。

これらを鼻歌混じりで取り出して傍においてあったナイフで器用に切り分け、グレイはそのままそれを食器に使い勝手に食事を始めてしまう。

「見事なまでに偏った食生活ね……」

その様子を、半ば呆れ顔でマコトが見つめる。

「自炊する手間もスペースも無い。そうになると、これが一番手っ取り早い」

言いながら、グレイは布がかぶさったバスケットから数切れのパンを取り出し、今度はそちらに食らい付く。

「お前も食え。明日は長丁場になる」

「そうね、たまには健康に気を使わないで生きてみるのもいいわ」

文句を言っていた割には素早い速度で手を伸ばし、マコトもその粗野な食卓に手を染める。

なにしろ腹が減っているのだ。仕方がない。

三大欲求には素直に。マコトは自伝のどこかに太字でこのフレーズをおうと心に刻んだ。

「そういえば……あんたが使ってるあの銃みたいなの、あれって何なの？」

「これか」

言われて、グレイは腰のホルスターから二丁の拳銃を取り出し机に置く。

近くで見れば、それは「銃」と言う名を冠するにはおかしな部分が多く見受けられた。

まず、一般にリボルバー型と呼ばれる型を模して作られているが

それにしても収められた銃弾に比べて砲口が異常に大きい。マコトが手にとって砲口を覗き込んでみると中は暗い空洞ではなく、少し奥まった場所に複雑な幾何学模様が描かれた魔方陣が彫つてある円筒状の鉄柱が見えた。

「どうやら撃鉄を下ろすとこれが押し出される仕組みらしい。」

「俺は魔術を扱う技術は持っているが、肝心の発現に要する魔力が皆無でな。そこでこの弾丸に込められた力をこの銃を介して発動させることで術を使っている」

「はー、なるほど。つまりあんたって才能無いのね」

「……説明の途中だ」

特に気分を害した様子も無く、グレイは語りを続ける。

「この弾には感応石を粉状にしたものが入っている。この街の発電施設が使っているのと同じ方法で半永久的に魔力を生み出し続けることができるが、一発撃つと約一日は待たないと使えなくなる。弾は一丁につき六発だから、俺は一日十二発分しか魔術を使えない。覚えておいてくれ」

余談だが、ミラの街の発電施設は何重ものローテーションを組んで24時間魔力を感応石から精製し続けている。グレイの特殊弾に込められたものとは規模も数も圧倒的に違うため、街全体を賄うほどのエネルギーを発電するに足る魔力を生み出すことができているのだ。

「あんたってそんなにひ弱だったの……？」

「ああそうそう、より複雑・強力になるにつれて使用する弾丸の量は増えていく。たとえばお前を助ける時に使った目くらましの閃光あれは一発で使えるが逃げるときに使った座標転移は三発必要だ」

「いよいよもって使えねーじゃないのよ」  
マコトはジト目で言い放つ。この女は他人への配慮というものを知らなかった。

「一日に使う量を節約すればいいということだ。そういうわけで、制限が無いお前の能力には期待してるよ。諸々の貸しと宿代、飯代

の分は遠慮なく使わせてもらう」

「まあ、それに異存はないけど」

こう言われてしまつては、是否もない。何しろ助けると言い出したのはマコトなのだ。

「俺からも質問だが……お前はなんでこの街に来た？世間知らずの田舎娘が、たった一人でなんの当てもない時点でなんとなく想像はつくが」

やっぱり気になるわよね、そこは。

グレイに問われて、マコトは本当のことを言うべきか逡巡した。

マコトの旅の理由は、大別すれば「家出」や「逃避」になるのだろうが、そこには少々やつかないな事情が付随する。

すべてを話す必要はない。結局、マコトはそう判断した。

「家出よ、家出。田舎に辟易しちゃってね。都会は最高だわ！ああ、麗しき大都会・ミラ。臭いチンピラのおっさん達が高举して襲ってくるのを除けばこんなにいい場所はないわね」

「十分致命的だと思うが……」

「そんなところよ。それにしても、どうするの明日は？地下に行くってことしかわかってないんじゃないわね」

「ああ、まあその辺りは大丈夫だ」

食事も終わり、散らかつたままの机を適当に片付けながらグレイは言った。

「とりあえずもう寝る。明日は長い。狭いがソファで我慢してくれ。毛布は貸してやる」

ぼふつと音を立て、グレイが投げたよこした毛布がマコトに頭から覆いかぶさつた。

「じゃ、おやすみ。ああ、この部屋内側から鍵かけれるから、心配ならそうしてくれ」

そう言つて、グレイは自分の寝室に去っていく。

（意外と紳士なのかしら？）

実のところ、マコトは多少なり覚悟をしてこの部屋に来ていた。

なにしろ、女が男の部屋に泊まるというのはそういうことだとさんざん聞かされて育っている。

だがまあ、さりとて何かされたい願望があったわけでもない。旅の疲れもあいまって、マコトは慣れないソファアの上でも割合早く睡魔に襲われた。

長い一日だった。この調子なら自伝に書くネタは尽きず、将来は印税生活ができそうだ……

そんなことを妄想しながら、マコトは完全に眠りに落ちた。

翌朝。

季節の変わり目でまだ肌寒い空気の中、グレイとマコトは郊外の下水道整備会社に向けて歩みを進めていた。

「寒いわねえ……海風かしら。なんだかんだでまだ春になりきっていないのね」

「単純に服装の問題だと思うが……」

そう呟くグレイの格好は黄土色の煤けたコートに、足は着古した黒ズボンという装いだ。

対してマコトはというと、ヒノ特有の民族衣装のみで、上着は何も羽織っていない。

その民族衣装というのも、長袖ではあるもののズボンの丈が膝から上までしかないので、素足が外気にさらされてしまいなんとも肌寒そうに見える。

「私の故郷はこの時期もう暖かいのよ。桜も満開でみな酔い狂うわ」「サクラ……ってなんだ？俺の知ってるサクラはやらせ客のことなんだが」

自慢げに言ったマコトは、グレイの返事に心底落胆して肩を落とした。

「桜を知らないとは。都会人に同情したのはこれが始めてね」

「というかそつちのサクラも私の知ってる桜が語源なのでは？ マコトはそう思いながらも、どうでもいいことなのであえて口には出さなかった。」

「そんなにいいもんなら今度見せてくれ。さて、着いたぞ」  
そう言つて、グレイは足を止める。

その下水道整備会社は中心街の華やかかつ新しい建物とは違い、古ぼけた昔ながらの石造りだった。

ガガラと言つていた、この街は地下が変わっていないという話少し考えれば、それは至極最もだという結論にたどり着く。

そもそもこの街は国が敗北した後に「魔導革命」によつて生まれ  
た技術の、言うなれば実験場だ。

当然短時間で完全な整備など行き届くはずがなく、突貫工事の果てに表向きだけの大都会は完成した。故に、未だ水道などの設備は以前のものを流用し、新たに整備し直す見通しも立っていないのが現状である。

「つまり……地下、すなわち下水道についてここで調べれば自ずと探し物の場所にたどり着けるつてわけね」

「そういうことだな」

「でもどうするの？ いくら古い建物だといつても見たところ警備は厳重そうよ。忍び込むにしたつて骨が折れそうねえ……私の力は派手すぎて使えないし」

「そんなことをする必要はないさ。そもそも真つ当に忍び込もうとしたらどれだけ弾を消費するかわからんしな……まあとにかく、見ている」

そう言つと、グレイは右手に例の銃を構えて建物の入り口からは死角になる壁に回りこむ。

5分ほど経つと、入り口からのっそりと中年の男性が現れた。整備会社のロゴが大きく刺繍された作業着に、同じくロゴが刺繍された帽子といういでたち。十中八九現場で働く清掃員だろう。

その彼に向かって、グレイは迷い無く引き金を引いた。

昨日と同じように突如として清掃員の後頭部付近に魔方陣が出現し、得体の知れない光が彼の頭からそこへと流れていく。

なんだかよくわからない魔術をその身にくらった清掃員は一瞬意識を失ったようだったが、すぐに気を取り戻す。特に何か変化がある様子も無く、不思議そうにその場をきよろきよろと見渡し

結局、何事もなかったかのようにその場を去っていった。

「さて、ここでの仕事は完了だ。一度ホテルに戻るか」

マコトの元へと戻ってきたグレイが、涼しげな顔でそう言った。

「はあ！？ まだ何も情報手に入ってないじゃない。ってかアンタ！ 何の罪も無いおじさんにあんな怪しげな魔術を施すなんて……

評価ガタ落ちよ。このシーンをみた後の大衆がなんて評価するか。

ああおそろしや」

マコトは性犯罪者でも見るかのような目つきグレイを見つめ、わなわたと肩をふるわせる。

「人聞きの悪いことぬかすな。あれは人間の記憶を一部だが複写する術だ。あのおっさんからはこの街の下水道の構造を複写させてもらった。忍び込むよりよっぽど楽で確実だ」

さすがにマコトの言い草が癪に障ったらしい。グレイは不機嫌そうにそう言った。

なるほど、確かに。

忍び込む際に騒ぎを起こして失敗に終わる可能性を考えれば、実に有用な手段である。

まったく、都会の魔術は便利極まりない。マコトは感嘆の息をついた。

「理解したか？ では戻ろう。お前に風邪を引かれても困るし、調べ物もある」

そう言うと、グレイはそそくさとホテル方面に向かって歩き出す。マコトは意外にも自分の身体の心配をされたことに驚きつつ、グレイの後を付いていった。

いつの間にか、空はパレットから朱だけを取り出して塗りたくったかのように単色で染まっていた。

マコトとグレイが歩いているミラの発電施設付近の街灯にも、ぽつぽつと明かりが点き始めている。昨日も思ったが、こんなに早く点け始めるのは資源の無駄使いではないだろうか？

ちなみにマコトの故郷は、日が完全に没さぬうちから篝火をたぐことなど考えられない土地だった。そんなことをしたら冬を越せなくなってしまうからだ。

エネルギー問題は決して軽視できないが、話を進める上では何の関連性もないのでさておく。

あの後ホテルに戻った二人は市内の地図を引っ張り出してきてグレイが魔術によって得た知識と照らし合わせ例の“探し物”の位置にあたりをつける作業に取り掛かった。

グレイの使った魔術は単に地図を奪うよりよっぽど効果があるらしい。あの中年の清掃員が持ち合わせていたであろう下水道の知識だけではなく、土地感までもがグレイの脳内には見事に複写されていた。

それもあってその作業は意外にも短時間で終わらせることができたが、なぜかグレイはすぐに現場に行くことをせずホテルで休むことを主張した。理由を聞いても「時刻が悪い」とかマコトにはよくわからないことを言うばかりであった。

だがまあマコトとしてもいつ行動するかなんてのはどうでもいいことであつたし、そもそもこれは単なる手助けなのであって、自分が主体性を持つ意味はないと判断し部屋の中で適当にぶらぶらしたり自伝の構想を立てたり当たり障りの無い話をグレイにふったりして過ごしていた。

ようやくグレイが「移動しよう」と言い出したときには、こんな時刻だったというわけだ。

「いい頃合だな。この調子なら目的地に付く頃には完全に夜中だろう」

「さつきも思ってたけど、それに何の意味があるわけ？さっさと行って済ませりゃよかったじゃない」

ぼつりと言ったグレイの言葉に、マコトは不思議そうに問うた。

「気にするな。わからんで終わったほうがありがたい」

「……？」

これ以上追求しても無駄そうだったので、マコトは話を打ち切った。

程なく、ホテルで調べておいた最も目的地に近いであろう地上と下水道の接点であるマンホールに到着する。

「妙だな」

それを見るなり、顎に手をあてグレイは呟いた。

「何が妙なの？」

「昨日の俺が見たら何も思わなかったんだろうが、今朝入手したカイン・アダルバートの記憶が俺に違和感を訴えかけるんだよ。このマンホールは……不自然な方法で開閉された形跡がある」

至極真面目な顔でグレイが言う。対してマコトは「あの清掃員、そんな大層な名前だったのね……親馬鹿って恐ろしいわ」などと考えていた。

「下には何かいると見てよさそうだ。最も、想像はつくが」

それにはマコトも同意だった。まったくあの連中はこんなことをしているからいつもゴミ臭いのだろう。

一応、用心しておけ。それだけ言ってグレイはマンホールの蓋をこじ開けた。これも清掃員の記憶の賜物だろうか？見事な手際である。誰にも見られていないことを確認して、グレイとマコトはミラの

下水道へと静かに侵入した。

思ったとおりだ。

グレイが続いて下水道に降り立ったマコトは、鼻が曲がるような臭気に混じったかすかな殺気を感じ取った。注意していなければ見過ごしてしまうようなわずかな殺気だ。

的確に侵入経路を見抜いた点といい、見事と言えなくもないが結局ばれてしまつては意味がない。雑魚とはかくも悲しいものか……マコトは心の中で合掌した。

くるぞ　グレイが傍の水流の音にかき消されるほどに小さい声でそう呟いた次の瞬間、マコトの背に鋭い刃が振り下ろされた。

だがその動作を既に読んでいたマコトは難なく回避に成功。代わりに石の敷き詰められた水路にあたつた剣は、金属と石が擦れる甲高い音と共にわずかな火花を散らした。

「くそっ！」

奇襲を避けられたことにあからさまに動揺した男が悪態をつく。

この状況では暗闇は返つて不利と思つたのか、待ち構えていた男達は次々と松明に火を灯し始めた。その数、約三十。

薄明かりに照らし出されてあぶり出た襲撃者達の正体は、やはりとうかなんというか……例のチンピラ達であつた。これで三度目だつたか？マコトは思わず嘆息した。

それにしても、よくまあこれだけの人数がこの狭い通路にひしめき合っていたものだ。こいつらは狭いところに集まる習性でもあるのだろうか。冬場のテントウムシみたいな連中である。

「どうでもいいけど、あんたらいつからここにいたわけ？」

マコトがジト目で問いかける。

「昼前からだ。悪いか」

集団の奥の方にいたらしいガガラがそれに答えた。ちなみに今は夕刻である。

「うわ、お疲れさま。帰つたらさすがに風呂入つたほうがいいよ」  
親切心から言つたのだが、その言葉で連中の怒りは頂点に達したらしい。まあ、さんざん臭いところで待たされた拳句奇襲も失敗し

ただだから無理からぬことだった。

雄たけびをあげて松明を手近な地面に放り投げ、空いた手に思いの武器を手にして襲い掛かってくるチンピラ達。どうやら怒りとストレスで脳内麻薬はただ漏れ状態のようだ。

「あのボス面をやらせてくれない？ 個人的にリベンジしたいのよね」

男達の怒号に恐怖心を抱いた様子もなく、マコトはそう言った。

「かまわないが……恐らくあいつは強いぞ。手腕だけを見れば相当なものだ」

「いいのよ。問題ないわ」

「わかった。雑魚はまかせておけ」

それだけ言つて、マコトとグレイはチンピラが武器を振りかざす前に散開した。

\*

こいつら相手に弾を消費する必要はない 約三十人もの筋骨隆々な男達を前に、グレイはそう判断していた。

いくら自分にかつての力が無いとは言つても、こんな連中に術無しで勝てないなんてことになれば名が泣くというものだ。いつかこの時の話をあいつにする時に、笑いものにされるのはご免被りたい。一番手前にいた男が気合と共に手にしたナタを振り下ろしてくる。グレイはそれをひらりとかわすと、煤けたコートの内側からシャープな外見の鉄製ロッドを取り出し、そのままの勢いで男の腹部に叩き付ける。

骨の碎ける耳障りな音と共に男はよろめき、スローモーションで背後に流れる下水へと落ちていった。

あまりにもあっけなく仲間がやられたことに驚愕し、残りのチンピラ達は目を丸くする。

「さて、どうする。全員でかかってくれば案外なんとかなるかも知

れんぞ?」

ロッドを新体操のバトンかなにかのように右手でくるくると回しながら、グレイは口元に不敵な笑みをたたえる。

「またもご丁寧に怒りを露にし、一斉に挑みかかってきた男達に対してグレイは大立ち回りを開始した。」

\*

地面を強く踏み鳴らすことによって術を発動させ、超人的な跳躍力でマコトは男達の頭上へと飛び出した。

そのままひしめき合っている男達の頭を足場にする。飛び跳ねるたびに暗闇に一瞬光るマコトの足首は、ある種幻想的でさえあった。「よつと。やつほー」

瞬く間にガガラの元へとたどり着いたマコトは、場にそぐわないあつげらかんとした声で言う。

「少々、嬢ちゃんを舐めてたらしいな」

そう言ったガガラの顔はマコトのはるか頭上にあつた。間近に立つてみると、その体格差はまさに大人と子供以上である。この男の前ではマコトなど赤子に等しい体躯しかなかった。

「私もよ。都会のチンピラがここまでしつこいとは思わなかったわ。これじゃストーカーが横行するわけよね」

特に気分を害した様子もなく、ガガラはゆっくりと構えをとつた。どうやらこの男だけは簡単には挑発にのつてくれないらしい。

「だがなあ嬢ちゃん。こつち以上にそつちは俺を舐めてる」

言い終わらるか終わらないかのうちにガガラの巨体がマコトに襲い掛かった。鋭敏な熊のようなその豪腕は、寸でのところでマコトの身体を掠める。避け切れなかった部分の衣服が破れ、宙へと舞つていった。

お気に入りの民族衣装が台無しになったことを悲しむ余裕もなく、ガガラの追撃は続く。マコトは巧みに身体をそらし直撃を避けるが、

ゆっくりと確実に袋小路へと追い詰められていった。

やはりこの男……強い。

容姿に似合わず堅実な戦い方といい、こちらの動きを読んでいた点といい、只者ではないのだ。

(けど生憎 私も只の女の子じゃないのよね)

一瞬の隙をついてガガラの包囲から抜け出し、振り返りざまに相手の腰に目掛け右手で強烈な裏拳をお見舞いする。当たった瞬間、暗い地下道を眩く照らすほどの光がマコトの右手首からあふれ出した。きつちりと術は発動している。

だがガガラの身体は吹っ飛ばされるどころか、強靱な筋力で衝撃の大部分を吸収した。いつもの気持ちのいい感触ではなく、砂がたつぷりとつまった袋を殴ったような手ごたえだ。

「いてえよ。このクソアマが」

こめかみに青筋を立ててガガラは悪態をつく。言葉とは裏腹に大して効いている様子も無い。

見誤った。普通の相手ならこの一撃で終わりだったのだろうが、この大男に仕掛ける攻撃としては浅すぎたようだ。

攻撃が効かなかったことに少なからず動揺していたマコトは、間髪入れず襲い掛かってきたガガラの鋭い蹴りをよけることができなかった。普段自分がしているように、今度は自分が相手に吹っ飛ばされてたつぷり二秒間は滞空する。

「かはっ……」

さすがに全身が痛い。それに口の中を切ったようだ。こみ上げる自らの血に咽びながら、マコトは自らに迫るガガラを睨み付ける。

「安心しな。すぐには殺さない。表に連れ出してから昨日の続きをしてやるよ」

下卑た笑いを顔に貼り付けながら腕を振り下ろそうとするガガラの背後に向けて、マコトは小さな針のようなものを投げつけた。

「？」

ガガラが不思議そうに背後を振り返った次の瞬間、不意に下水の

流れから伸びてきた幾重もの水の触手がガガラにまとわり付いた。大蛇のうねりのようなその戒めは、抵抗しようにも力がうまく込められず決して標的から離れようとはしない。

「私がただふつとばすしか脳の無い女の子だと思った？ そんなんじや大衆はサクセス・ストーリーを読んでほくれないのよ……！」

これこそが、マコトの“とっておき”だった。自らが魔力を圧縮し作り出した針を、自然物の「脈」目掛けて穿つことで超常現象を引き起こす。

両手両足に刻まれた刺青のように比較的大多数の人間が使えるポピュラーな辺境魔術とは違い、マコトの血脈だけに使うことが許された特殊な力である。最も、その血脈のせいで彼女がこんな大都会まで家出してくるようになったのを考えれば酷く皮肉な話ではあったが。

「下水はいろいろ混じっちゃって扱いにくいけど、あんた捕らえるだけなら十分よ」

マコトは地面に向かって血混じりの唾を吐きつつそう言った。

ゆっくりと拳を垂直に構え、短距離走の選手のように足を壁へとあてがう。そのままガガラを真芯に捉え

弾かれた玉のように、まっすぐに突進する。

そのまま、マコトの右拳は下水道の暗闇をかき消すほどの閃光を放ちながらガガラの見事に割れた腹筋へと激突した。

壁を蹴った際にも足首に刻まれた術が発動したため、まさに烈風の如き速度である。速度が二倍される度に四倍に膨れ上がるそのインパクトは、すべてがガガラの腹部へと集約された。いつもなら地平のかなたまで吹っ飛ばしているところだろうが、複雑に絡んだ水の触手がそれすらも許さない。

短いうめき声のあと、ガガラは大量の血を吐いて力なく四肢を垂らす。その様子をみたマコトは、ガガラを縛っていた水の触手も解除した。

「なかなか強敵だったわよ。きつと後の大衆はあんたの名前ぐらい

は記憶するかもしれないわね」

そう言ったあと、マコトは自分がこの男のフルネームを知らないのに気付いた。自伝に情報が欠けてはいけない。たぶん知っているだろうからあとでグレイに聞いてみよう。

そんなことを考えながら、マコトは裏町の長である大男の成れの果てに背を向けた。

「すまなかつたな」

程なく、雑魚を片付けてきたらしいグレイがやってきてこう言った。煤けたコートは先ほどより汚れてはいたが、彼自身に傷はまったく見受けられない。どうやらこの男も只者ではないようだ。

「何がすまなかつたの？」

一部が破れてずり落ちそうになっている民族衣装を引っ張りあげながらマコトは問い返す。どうでもいいが、今頃になって悲しくなってきた。この服どうやって仕立て直そうか？

「さつさと片付けて加勢に向かうつもりだったが、少々手間取ってしまった。術を使って手っ取り早く倒すべきだったな……ただの手伝いのマコトに怪我をさせてしまった」

「いいのよ別に。個人的にぶつとばしたい奴だったし。これくらいはなんともないわ」

これは本心だった。昨日の一件は肝を冷やしたし、少なからず怒りもした。ここでその溜飲を下げられたのは手伝いとは別の話で、むしろラッキーと思えるほどだ。

「そうか。だが一応元に戻しておこう」

そう言って、グレイは例の二丁拳銃を取り出し交互に引き金を引いた。空中に出現した二つの魔方陣がマコトの身体を取り囲み、目まぐるしく動き出す。なんとも奇妙な感覚だった。

「……よし。では先へ進もう。目的地はもうすぐそこだ」

グレイが頷いてそう言ったとき、マコトは初めて自らの怪我が完全に完治しているのに気付いた。それどころか、先ほど破られた衣服までもが元に戻っている。

「って、なにコレ!？」

思わずマコトは目を丸くした。いくらなんでも凄すぎる。

「局所的な情報復元だ。それくらいの怪我と服の破れなら修正できる。まあこれ以上広範囲な物理的損壊は直せないから実用性はあまりないけどな」

なんでもないようにグレイは言う。だとしても、便利なことこの上ない能力だというのは間違いなかった。

(何者なの?)

ここに来て、マコトはようやくその疑問にぶち当たった。

自分やさつきぶっ倒した大男だつて一般的な尺度に当てはめれば只者でないのだろうが、この灰色髪の方はその度合いが段違いだ。なにしろ「魔力が皆無」という点を除けばほとんどなんでもありなのである。今までに見せた能力以外にもできることが数多くあるとこのは想像に難くない。

「こつちだ。早く来い」

考え込んでいるうちに、グレイはさつさと進んでしまっていた。

マコトはあわてて追いかける。

とりあえずこの件は保留にしよう。何しろ自分はただのお手伝いだ。これ以上の邪魔が入るとは思えないし、終わってしまったらもう関わり合いになることもない。貸し借りがゼロになればそれで自分の気も晴れる。

グレイがどれだけ異常な経歴をもつ人物でも、そうなればもはや自分には関係ない。この一連の出来事は自伝の中のエピソードのひとつに過ぎなくなるだろう。何も問題は無い。

そう考えて、マコトは思考を停止する。

グレイの目的物 “ノイズ” があるという場所はすぐ側まで迫っている。

灰になった英雄

奇妙な不安と期待感が入り混じった胸中で、マコトは元の暗さを取り戻した下水道を歩いていった。

### 第三章

この物語は、私のサクセス・ストーリーだ。

断じてフィクションの冒険譚や国の陰謀を紐解くミステリーではない。

けれど、どうしてだろう？今でも、私にはわからないが

これを読むあなたには、そちらのほうがじっくりくることだろう。

イザナミ白書：端書

「ここまでできてアレなんだけどさ。 그레이の探してる“ノイズ”って一体何なの？やっぱりおたから？」

未だに続く下水道の道を歩きながら、マコトは何気なく質問する。意図は無い。単純な好奇心からだ。

「着けばわかる……と言いたいところだが、妙な期待をしないように言っておく。別に“ノイズ”は宝でもなんでもない。興味があるのは俺ぐらいなもんだろう。それどころか大変な危険物だ」

「危険物 なの？ それじゃ、なんだってアンタはそんなもんに興味があんのよ」

「……着いたぞ」

マコトの質問には答えずに、 그레이はそれだけを告げた。だが見たところこれまでの壁となら変わるところは無い。

「この場所から強い魔力の波を感じる。マコト、この壁を壊してもらえるか？」

疑問を感じ取ったのか、もっともらしい説明を付け加える 그레이。

マコトにはそんなよくわからない波なんて感じられなかったのだが、特に意見をすることもない。グレイがそう言うのならそうなのだろう。

納得して、言われたとおりに壁を破壊するため二、三步あとずさるマコト。先ほどの要領で加速し、なるべく威力を一点に抑えるよう留意して手首の閃光と共に一撃をお見舞いする。

局地的な地震でも発生したかのような轟音と土ぼこりをあげながら壁は崩れ去った。そして　やはり。グレイの言ったとおり、ここには新たな通路が出現していた。今まで歩いていた下水道の道とは明らかに違う、不可思議な材質でできた通路だ。根拠はないが、マコトはそれを不気味に感じた。

「行こう」

それだけ言っ、通路の奥に向かうグレイにマコトも続く。

「……？」

一歩その不可思議な通路に足を踏み入れた瞬間、マコトはなにやら悪寒のようなものを感じ取った。これがグレイの言っていた「強い魔力の波」とやらなのだろうか。マコトにはそれはむしろ「近寄るな」という警告の声であるように思われた。断じて追い求めるようなものではない……少なくとも自分にとっては。

だがここまで来て引き返す道理も無い。珍しく弱気になっている自分に湯を入れ、マコトはさらに奥へと歩いていった。

その空間は意外にも昼下がりの室内ほどの光量があり、加えてその中に丸々二階建ての一軒家が建つのではないか思える広さをも備えていた。

部屋を取り巻く幾何学模様が光源であるらしく、独特の影を作り出している。見ようによっては美しく見えないこともないだろう。だが真つ先にマコトの目を捉えたのは、空間の中心に位置する異形

の人型をした石像だった。

単純な人間像ではない。背格好こそ人間大だったが本来あるべきはずの耳や髪はなく、代わりに人間にしては長すぎる爪やあるはずもない突起をいくつか備えていた。

悪魔や魔族。そんな呼び方がしっくりくる。同時に、その石像が例の「強い魔力の波」の元だということぐらいはマコトにもわかっていていた。これはただの石像ではない。

「一体何なのこれは。言っとくけど美術品だとか彫刻だとかつまらないことぬかしたらぶっ飛ばすわよ」

マコトはそう言つて、意思のこもった瞳でグレイを見つめる。

「……魔王、だ。遙かな昔この国を荒らしまわった末この地に封印された。少し大きな図書館に行けば載っている本もあるだろう。最も、今となつては正確な情報かどうか怪しいものだが」

悪魔、魔族　そんなところの話ではなかった。

魔王。そう呼ばれるからには、軍勢を率いて国を侵略しそれなりの恐怖を大衆に与えていたのだろう。百歩譲つてそれはいい。そういうものが実在することはマコトでも知っていた。

だが……

「なんだつてアンタがそんなもんに興味があるわけ？」

先ほどはぐらかされた質問を、一字一句違わず浴びせかける。もう言い逃れは許さない。

そんなマコトの思いを悟つたのか悟つてないのか、グレイはその質問に対して口を開いた。

「こいつそのものには興味はないさ。別に封印を解いて暴れさせようって腹もない。俺に必要なだったのは、こいつを封印している術式だ」

そう言つて、グレイは二丁の拳銃を構えた。それぞれ部屋の上空に向けて掲げ、引き金を引く。

いつものように出現する三つの魔方陣。そこに向かって、部屋全体の幾何学模様から得体の知れない光がゆっくりと渦を巻いて吸い

込まれていく。

この術には見覚えがあった。規模は違うが、昨日あの大層な名前の清掃員に向けて使った魔術だ。

あの魔術は記憶を複写するものと聞いていた。記憶を情報と置き換えるならば、今この部屋全体を覆っているグレイの言うところの「封印の術式」とやらはグレイの頭の中へと流れていったことになる。

つまり、目的は完遂したのだ。晴れてマコトもお役御免というわけだが、どうにもすすきりしない。

「念のため聞いておくけど、その術式とやらを何に使っわけ？」

さらに質問を重ねるマコト。聞いておかなければ、自分の気が済まなかった。

グレイはなにやら逡巡しているようだった。無理も無いことだったが、言わないのであれば実力行使もやむを得ない。

「ここまで引つ張っておいて秘密です、さようならではフェアじゃない、か。いいだろう。俺の目的は 八年前に封印された“暁の魔王”を解き放つことだ。そのために、“ノイズ”を封印した術式の情報が必要だった」

逡巡の果て、ややためらいがちに発したグレイの言葉。これにはマコトもショックを受けた。後頭部を鈍器で不意打ちされたほうが幾分マシだったかもしれない。それほど衝撃だった。

暁の魔王。

八年前、勝てるはずの《オラトリオ》との戦争を敗戦に導いた元凶。

突如として現れたこの化物は国の主要都市に壊滅的な打撃を与え、指揮系統を徹底的に混乱させた。

戦勝ムードに包まれていたこの国の誰もが、あつてはならない現実に絶望する。あとほんの少しで長い戦争が明けるといふこの時期だからこそその反応。敵国もそれを見逃すほど愚かではなく、戦意を喪失した軍は次々と敗北を喫する。

今この国、《ベルデ》が《オラトリオ》の属国とならず無条件降伏だけで済んだのは、その時勇敢にも立ち上がり自らの命と引き換えに魔王を封印した“二人の英雄”のお陰に他ならなかった。

故に、この国に住まう者で“暁の魔王”と“二人の英雄”の逸話を知らない者はいない。なにしろ辺境の、さらに当時八歳だったマコトですら聞き及んでいるのだ。

「まさか、オラトリオのスパイ？」

マコトは頬を伝う冷や汗を拭うこともせずグレイに問うた。無条件降伏という和議に至ったのを良しと思わないオラトリオの密偵が魔王を復活させ、今度こそ完膚なきまでにこの国を叩き潰そうと考えるのもありえなくはない。

「俺は正真正銘のベルデ人さ。それも根っこからどつぷり潰かったな」

片手で眼鏡を抑えながら、なぜか自嘲気味にグレイは答えた。

「じゃあなんで！？ あんただって知ってるでしょ？ あいつのせいでこの国は負けたのよ！ それを復活なんてさせたら国にも二人の英雄にも申し訳が立たないってことがわからないの！？」

堰を切ったように感情が流れ出す。誰だつて国を滅ぼしたいとは思わない。それはまだ十分に少女であるマコトでも同じだった。なにしろまだ、たったの八年しか経っていないのだ。再び戦乱の世に舞い戻るには早すぎる。

「たとえば」

マコトの必死の問いかけが、届いているのかいないのか。グレイは遠くを見る目で語りだす。

「たとえば、お前の大切な人が誰かに囚われたとする。その人を助けるためにはあらゆるものを敵に回す必要がある、さらに自分は助けるための力も失い、無力になっていたとする。そんな時……お前だったらどうする？」

馬鹿げた理論だ。何故こんな話を始めたのかはわからないが、マコトの答えは決まっていた。

「どうにもならないことは、どうでもいい。どこに言っても通ずる理論よ。これが賢い生き方だわ」

「……だろうな。だが生憎、俺はバカなんだよ」

真正面にあるはずの 그레이 の瞳は、マコトの後頭部をすり抜け遙か彼方を見つめていた。

ここではない、今ではない“どこか”を。

「話が見えないわ。つまり、アンタは」

何が言いたいのか。

最後まで言葉を紡ぎ終える前に、マコトのソプラノよりも遙かに大きな轟音が覆いかぶさった。

この空間の入り口から絶え間なく鳴り続ける重低音。遅れて聞こえる乾いた金属音。ガトリングガンの発砲音と、その薬莢が床に落ちる音。

弾かれたように横っ飛びに回避したマコトと 그레이 の瞳に、それを実行した人物が映し出される。

口の端から、麻薬中毒者が垂らすよだれのように絶え間なく血を流し続ける大男。先程マコトが打ち倒した裏町の顔役、ガガラに他ならなかった。

一体どこに隠していたのか、マコトの身の丈ぐらいはありそうなガトリングガンを携え、まるで手負いの野獣のように低いうなり声を上げ続けている。その瞳に意思は感じられず、とても正気を保っているとは思えない。

あれほど徹底的に痛めつけてやったのに、まだ動けたとは。マコトはガガラのタフさに恐怖すると共に若干の感動すら覚えた。まったく、その点については負けを認めざるを得まい。

マコトと 그레이 が既に射線上から遠く離れたことにも気付かないのか、ガガラは正面に位置する異形の石像に向けてひたすらに銃撃する。どうという理屈か、銃弾を雨のように浴びせかけられているにもかかわらず石像には傷ひとつつかなかった。

やがて弾が尽き、同時に肉体も限界に達したのか、ガガラはガト

リングガンを腕から取りこぼし、そのまま固い地面に突っ伏した。おそらく死んではいないのだろうが、もはや立ち上がることはできないだろう。

「いたちの最後っ屁ってヤツね。まあ、無駄だったんだけど」

地面に伏せて銃撃から避難していたマコトが、服についたほこりを払いながら立ち上がる。

予想外の邪魔者のせいで、話が寸断されてしまった。今度こそ「愚か、ですね。私をあれだけ嚴重に封じ込めたことを忘れたんでしょうか。この街を作り上げた人間も、そこで倒れ付した人間も……皆、愚か」

話を軌道修正しようとしたマコトの口は、だがその続きを紡ぐことは無く、代わりに目の前の物体を見たことによるショックで半開きのまま固定されることとなった。

動いている。それどころか、その瞳は誰がどう見ても攻撃色のクリムゾンレッドに染まっており、さらに全身からはマコトでもはっきりわかるほどの敵意あるオーラが立ち昇っている。

先程まで単に不気味なだけだった“ノイズ”という名の石像は、今や同名の生きた魔王に成り果てていた。

「ちよつと！ あんたさつき魔王の封印を解くのが目的みたいなのと言ったわよね？ あっさり解けちゃってるんですけど！？ 後世に私のサクセス・ストーリーを読む大衆の総ツツコミが入るわよ。どうしてくれるの！！」

誤って善意の市民を撃ち殺してしまった警察官のように手を震わせながら“ノイズ”を指差したマコトが、やはり声も同じように震わせながらわけのわからないことをがなりたてる。

「俺が解こうとしていた“暁の魔王”の封印はたったの八年前だが、こいつが封印されたのは記録にも残っていないほどの大昔だ。時間の流れによる封印の劣化が段違いなんだよ」

この状況はグレイにとっても少々緊急事態であるらしく、珍しく一筋の汗を額に流しつつも話を続ける。

「さらに さつき封印術式の情報を手に入れてわかったことだが、この術式は酷く歪んでいる。恐らく、この街を作る際に無理な突貫工事を繰り返したのが原因だろう」

それを聞いてようやくマコトにも合点がいった。大戦後わずか八年の後に『大都会』と言われるまでに育ったミラには、まともな都市計画など土台無理だったという話はこの二日間であらう発電施設の真下だ。ましてや、ここは一番建造を急がれたであろう発電施設の真下だ。突貫工事の果てに地層が歪み、この空間がおかしなことになっていたとしても不思議ではない。

とどめの一撃が先ほどのガガラによる銃乱射、というわけだ。

「なるほどね。あそこにいらっしやる殺気むき出しで目ン玉ギリギリさせてる気っ色悪い魔王サマがお目覚めになった理由はわかったわ。で？ たぶんだけど、ン百年たっても性格は変わってなさそうよ」

半ば自棄になり、顔を引きつらせるマコト。暴言を吐きながらも、足はじりじりと後退を続ける。

「みたいだな。だが元よりお前はただの手伝いだ。逃げるなら止めない。最も、その手助けをする余裕はなさそうだが」

「乗りかかった船よ。サクセス・ストーリーが一時ジャステイス・ストーリーになるのも悪くないわ。話の続きはあいつを何とかしてから聞くことにする。いいわね？」

強がりながらも、マコトは「ああ、私のサクセス・ストーリーはたったの一章で終わりかもしれない」と半分涙目で考えていた。それ以前に、まだ書き始めてもいないのだが。

「ああ。恩に着る」

グレイがそう言ったあと、すばやく目配せしたのに気付いたマコトはほとんど直感的に横へと身を翻した。

刹那、ノイズの長い爪が擦りあわされたことによって生まれた不協和音が部屋中をでたらめに決る。

表現の間違いではない。

文字通り、“音が部屋を抉った”のだ。

三百六十度、全方位に向けられたその攻撃は、マコトをも例外なく抉りつける。

致命傷には程遠いダメージだったが、さりとてまったく問題ないという傷でもない。連続して同じことをされれば勝敗は火を見るより明らかだ。

「逃げてでも無駄ですよ、人間。久しぶりの獲物なのでですから、できるだけ長持ちしてほしいとは思いますが。まあ、あっさり死んでくれれば上の人間を狩る楽しみができるのでそれもいいかもしれませんね」

空恐ろしいことを言いながら、凄惨な笑みを浮かべるノイズ。表情を形作るパーツが欠けたその顔は、人間が同じ表情を作るより一層恐ろしく見えた。

「マコト！あいつは『音』を媒介にした魔術を使う。ここには勝ち目がない！」

同じく不可解な攻撃を食らい古びたコートをずたばろにしたグレイの呼びかけで、マコトはこの攻撃の正体に気付いた。

『音』の波に物理的な衝撃を乗せる。それがこの魔王サマの能力だったのだ。人間である以上、音速を超える速度で回避などできるはずもなく、また『音』などどこにでも発生する上にどこにいようと自動的に全方位に拡散する。まさしく魔王の名を冠するに相応しい……かつ、反吐が出るほどやっかいな能力である。

話し声や地面を蹴った音に反応していないのだから、万能というわけではないのだろう。それだけが唯一の救いだ。

「わかったわよ！でも」

言いかけた声を遮り、グレイはマコトに向かって見事な健脚で走り寄るとそのまま片手で細い肩を抱きかかえた。マコトが顔を赤くするのにもおかまいなしで、空いた手に握った銃の引き金に力を込める。

次の瞬間には、マコトとグレイは煌々たる明かりを灯す発電施設

の前へと転移していた。いつの間にか太陽は完全に世界の裏側へと消え、代わりに現れた黒き天蓋が頭上を覆いつくしている。街の明かりが強すぎるのか、星一つ見えない夜空は文字通りの漆黑だった。こんな状況にも関わらず、マコトは目の前の発電施設に目を奪われる。例の「魔力発電」とやらを行っているからなのか、この無人施設全体は淡い白光に包まれていた。夜空とのコントラストは、最先端の技術であることは裏腹に神秘的な雰囲気を漂わせている。

「今からあいつをどうにかする算段を伝える。よく覚えてくれ」  
グレイの至極シリアスな口調で、マコトは途端に我へと帰る。  
「ここ、さっきまでいたところの真上じゃない。こんなとこにいちやすく捕まっちゃうんじゃないの？」

グレイの言葉を見無視し、頭に浮かんだ疑問をぶつけるマコト。大体、さつき術が発動した際に現れた魔方陣はたったの一つだった。昨日は三つ出現したはずだ。移動距離も昨日に比べると短すぎる。「座標転移で逃げ出すことも可能だったが、俺達だけが移動したらあいつは標的をこの街に変えてしまう。それは目覚めが悪いし、単なる責任放棄だ。だからあえて規模を縮小してあいつが追跡しやすくした」

丁寧に答えてくれたグレイに感謝しつつ、マコトは納得した。まさにその通りだ。

「いいか、俺の銃に残された弾はあと六発だ。これをすべて一撃に使う。お前はその隙を作ってくれ」

続けて、グレイは算段の内容を説明していった。ノイズは自らが作り出した音を媒介にして術を行使する。音を作り出せないようにさらに大きな音を作り続けてくれ。かいつまんで言うならば、そんなところだ。

「それもいいけど、もっといい案があるわ」  
ノイズの能力を把握し、かつその上で自らの“とっておき”を勸案し生み出した新たな作戦。マコトが語った内容は非常にユニークであり、グレイもそれに驚きつつも賛同した。

「それじゃあ、準備にかかるわよ」  
呟いて、マコトはその作戦に向けて指先に魔力を凝縮し、いくつかの『針』を精製していった。

「座標転移の足跡を辿ったときはまさかと思いましたが、逃げずに待ち構えていて下さいましたか」

数分経って、ノイズはマコトとグレイの目の前に衣擦れの音さえ無く、その名に似つかわしくないことだったが、現れた。どうやらこいつもグレイと同じワープもどきが使えるらしい。しかもこちらは回数や距離の制限などというやっかいな縛りはなさそうだった。

「あんたを街中で暴れさせるわけにはいかないからね。ここで仕留めさせてもらおう」

自信たっぷりにいったマコトの言葉に、ノイズは心底可笑しそうに低く笑った。

「いつの時代もいるものですね。身の程知らずな人間は」  
言い終わると同時に、ノイズが先ほどと同じ爪を擦り合わせての不協和音を発する。

音速で伝わるその攻撃は、この距離ではガードすら間に合わない。マコトとグレイは元々ぼろぼろった服をさらに破かれながらもそれを意に介さず、所定の行動……ノイズに背を向けての全力疾走を開始した。

既に『罨』は張つてある。

あとは最後の一针を穿つだけ

「どうしたんですか？ 私を楽しませて下さいよ。これではつまらない」

心底不服そうな口調でノイズは言って、便利なワープ能力である座標転移を使いマコトの目の前に出現した。

どうやら直接手を下そうという腹らしい。長い爪を振りかざし、マコトに向かって突き刺そうとする。

その様子に臆すことなく、マコトは地面を斜め三十度の角度で蹴り、術を使った移動でそれを回避。そのまま流れるような動きで手の中の『針』をノイズの足元に穿つ。

石畳に突き刺さった『針』は地の脈を刺激し、そこから数本の石槍を作り出した。地面から伸びた鋭い石槍は真っ直ぐにノイズを貫き、同時にその動きを拘束する。

「面白くなってきましたね。その調子です」

全身を石槍に貫かれ、青い血を勢いよく噴き出しているというのに、ノイズはなおも余裕の表情だった。

「その余裕面も、そろそろ見飽きたわ」

マコトはそう言って、あらかじめ穿ってあった数本の『針』に込められた力を解放する。

一見すると状況は何も変わってはいようだったが、すでに「作戦」は発動していた。

これがどうしたというのだ。恐らくノイズはそのようなことを言おうとしたのだろう。だがその声がほとんど伝わらないことに気付いて自分の置かれた状況を悟ったのか、初めて表情に小さな驚きを宿す。

マコトが穿っていたのは、“空気脈”だった。

ノイズの周辺の空気を限りなく真空に近くし、代わりにマコトの近くの空気を凝縮し厚くする。

そうすることで、ノイズの能力の発動媒体である音を発生させることを抑え、発生したとしてもマコトにたどり着く前に空気の壁で防ぐことができる。

これが作戦の第一段階だった。

「痛みに鈍感なのはいいことだけど、周りの空気が無くなったのも気付かないのは困り者よね。魔王なんてなるもんじゃないわ」  
その皮肉も、ノイズには伝わらなかつたのかもしれない。なにせ

あの周りの空気は雲の上よりも遥かに薄い。

「いいぞマコト。そこをどいてくれ」

そう言ったグレイの前には、既に巨大な魔方陣が出来上がっていた。時間稼ぎはうまくいったようだ。

両手に銃を構え、引き金に力を込める。それに呼応するように魔方陣は光を増していき、そこからノイズに向けて今しも必殺の一撃が放たれんとしたそのとき

石槍と真空の監獄に捕らえられていたはずのノイズは、その場から青い血だけを残して消え失せた。

「ここまで愚かだったとは。つまらない相手でした」

背後から聞こえる魔王の声。そう、いかに物理的な手段で捕らえ攻撃手段を封じたとしても、相手には空間を瞬時に移動する術があるのだ。

だがそれを考えに入れられないほど、マコトとグレイは馬鹿ではなかった。

口の端に小さく笑みを浮かべ、グレイは再度引き金に力を込める。瞬間、グレイの背後にいたノイズの足元の地面が幾何学模様の赤光を放ち、そこから、数え切れないほどの赤い刃が垂直に天へと昇っていく。

刃の中心にいるノイズを巻き込んだまま真っ直ぐ昇っていくその様は、さながら全てを焼き尽くすために地獄の底から立ち上った火柱のようだった。

「ビンゴ！」

マコトは思わず嬌声を上げる。

作戦の第二段階、それは、ノイズの行動を先読みすることに重点が置かれていた。

物理的に戒めを受け、攻撃も封じられたとしても、あの魔王さまにはまだ余裕があったことだろう。なにせ、自分はいつでもそこから移動することができたのだから。そこにグレイのあの巨大魔方陣を見るからに相手の切り札であり、これを使わせればこいつらは相当

に消耗するだろう。ならば使わせてから消耗した相手の隙をつき一気にケリをつける。そのように考えるであろうことは容易に想像できた。

敵の上手をいったと慢心した時こそ、最大の間隙が生まれる。

背後に現れるかどうかは五分五分だったが、どうやら当たりだったようだ。思惑通り、背後の地面に仕掛けてあったグレイの罠、弾丸五発分を使った局地攻撃用術式の上に移動してくれた。

ちなみに残りの一発は、例の巨大魔方阵をでっちあげるために使っている。あれは単にハツタリであり、大げさに光るだけのシロモノだ。

「うまくいったみたいだな。マコトのお陰だ」

弾丸を使い切った二丁の拳銃を腰のホルスターに仕舞いながら、グレイは小さく微笑んだ。

「まあね。でも魔王つてのも案外甘つちよろいわ。こんな罠に引っかかるなんて」

まさに敵を“たかが人間”と侮ったがゆえの敗北。あの世でさぞ悔しがっていることだろう。いい気味だ。

「……心外、ですね」

腕を組んで意気揚々と鼻を鳴らしていたマコトは、聞こえるはずのない声を聞いて背中をじっとりと汗で濡らす。

まさか。ありえない。

半ば恐慌状態で背後の赤い刃の柱を見やったマコトは、今度はその瞳までをも大きく見開く羽目となった。

全身血まみれで真っ青なノイズが、ゆっくりと這い出してくる。

そこから生まれる殺意は、以前でさえ尋常ならざるものだった。だが今はそこに烈火の如き怒りが加わり、どす黒い負の思念として周りのすべてを無差別に威嚇している。

まさに、魔王に相応しい圧倒的な存在感。気の弱い人間ならば、この場にいるだけで間違いないと卒倒しているだろう。

「確かにあなたたちを侮っていたようだ。だが、私には侮るに足る理由がある。私は　強い」

いたってシンプルな論理だった。強いがゆえに侮る。逆に言えば、侮って多少手傷を負ったところで、なんら問題ないぐらいに自分は強い……そういうことである。

「だから愚かだと言ったんですよ。半端に私を怒らせたあなたたちはねッ！」

裂帛の気合と共にノイズが放った叫びは、物理的な衝撃を伴ってマコト達に襲い掛かった。

先ほどの“爪弾き”の比ではない。無数の見えない刃が襲い掛かったかのように、二人の身体は衣服を通り越して中の肉までをも大きく切り裂かれた。

「ッ……」

たちまちマコトの足元には大きな血の池が生まれた。気を緩めばこの池にダイブしてしまうほど、ダメージは大きい。

絶望的な状況だった。自分はもはやくに動けそうに無く、頼みの綱であるグレイも先ほどすべての弾丸を使い果たしていて、ほとんどただの人間と変わらなくなってしまっている。今のグレイは自分が倒したあの男、ガガラにだって勝てないだろう。

打つ手なし。マコトはいよいよ覚悟を決めた。こんなことならさっさとサクセス・ストーリーを出版すればよかった。

第一章にしてデッド・ストーリー。それはそれで面白かったかもしれない。ほとんど遺書かもしれないが。

「マコト、下がっている」

マコトと同じく全身を血だらけにしたグレイが、その瞳に灯された意志の炎だけは決して燻らせずにそう言った。

まだ何か仕掛ける気らしい。だが一体この状況で、何ができると言っただろう？

その思いは口に出さず、マコトは黙ってグレイの背後に隠れ、事の成り行きを見守る。

グレイが「何者」か。それはまだ自分にはわかっていない。

だが、常軌を逸した人物であることは間違いないのだ。もしかすると、この状況をなんとかできるかもしれない

その希望はマコトの感情の中ではほんのわずかなパーセンテージを占めるに過ぎないものだったが、さりとしてそれ以外にすぎるものなど何も無かった。

「この期に及んで見苦しい抵抗。いい気持ちではありませんね。命乞いの一つでもしてみたらいかがですか？」

魔王の言葉に、グレイはなんらの動揺も見せず、静かに右手を天へと掲げた。

それが合図だったかのように、側の発電施設を煌々と灯していた白光が立ち消え、さらに周りの街灯も次々と消えていく。ただの停電ではない。それならば一斉に消えていくはずだ。

わけがわからないまま、停電した建物は湖を震わす波紋のように広がっていく。波紋の中心にいるのは 紛れも無い、グレイだった。

ついに大都会・ミラを包んでいた明かりはすべて立ち消え、世界は真の暗闇へと包まれる。

たったひとりの人間を残して。

「馬鹿な……！ たかが、人間風情が……！」

その様子を見ていたノイズが、初めて狼狽を露にする。冷や汗は見られなかったが、恐らく汗腺なんて器官はついていないのだろう。もしあれば、今頃あの不気味な顔は非常に笑えることになっているはずだ。

ちなみにマコトには汗腺がある。ここに鏡があれば、面白いことになっていたことは想像に難くない。

驚くのも無理からぬことだった。今やグレイは全身を眩い白光に包まれており、何も知らずにこの光景だけを見れば信心とは無縁のマコトだって神の御使いが現世に降臨したと思っただろう。

それだけではない。あの特徴的だった灰色髪はいつのまにやら艶

やかな黒に変色しており、それはマコトにあるイメージを沸かせた。思えば、なぜ今まで気付かなかったんだらうか？

あの顔。あの髪。そして何より、この魔王すら凌駕する圧倒的なプレッシャー！。

それらを備える人物に心当たりがない者は、この国にはいなかった。

英雄の片割れ 伝説の魔法使い、レンブラント・リクテンス  
タインに。

## 第四章

圧倒的。ひたすらに圧倒的な力の奔流が嵐のように身体を駆け巡っていく。

力を奪われたときは逆の、枯れた身体に若々しいエネルギーが舞い戻るような開放感。

八年前は常にこの力を有していたというのだから、まったく自分でも驚く他に無い。

それにしても、こつも切り札を出さざる得ない状況に追い込まれるとは。

ミリア。この分じゃ、お前を救い出すのは当分先になりそうだ

「ありえない。そんな力、人間が持っていない筈が無い！」

語気を荒げて言ったノイズの言葉に、グレイ いや、レンは静かにこつ答えた。

「お前の親戚にも似たようなことを言われたよ」

言った瞬間、レンは思わず自嘲した。こいつが親戚。あの“暁の魔王”と？

我ながら面白いジョークだ。あいつに比べれば、目の前で驚愕に身を震わせているこいつなど三流もいいところだった。

「……面白い。目覚めた瞬間本気を出すことになるとは思わなかったが、いいだろう」

覚悟を決めでもしたのか、はたまたこちらの実力がわからないのか。ノイズはそう言って、抑えていたらしい力を解放し始めた。なるほど、確かに一端の魔王ではあるようだ。『グレイ』のままでは

勝てないのも自明の理と言えた。

夜を待ったのは念のためだったのだが、どうやら正解だったらしい。

それも踏まえて、全部終わったら説明してあげないとな。

レンは側でぺたんとして座り込んだ未だに混乱しているであろうマコトを一瞥し、心の中でそう呟いた。

「マコト。そこを動かさないでくれ」

言いながら、レンは短く呪文を唱えるとマコトの周囲に防壁を展開させた。ついでに、傷だらけの身体と服を元通りに復元してやる。「聞きたいことがたくさんあるわ。早めに終わらせてよね、レンブラントさん」

情報が復元されていく淡い光に包まれながら、マコトはそう言った。どうやらもう正体はばれてしまったようだ。

「“レン”でいい。あいつはそう呼んだ」

「あいつ？」

「俺のお姫様だよ」

不思議そうに問うマコトに、レンは何の恥じらいも無く答えた。

「戦闘中におしゃべりとは。随分と余裕ですね」

ですます調をあつさり復活させながら、ノイズがそう言った。ついでに、さっき負わせてやった傷はほとんど修復されてしまっている。まったく、魔王って人種はみんなこうなんだろうか。

そう考えていると、突如レンの間近で爆発音が鳴り響く。ただの爆発音ではない。ノイズの魔力が通っている。それが証拠に、辺りの石畳がぼろぼろと弾け飛んでいく。マコトに防壁を張っていてよかった。今のマコトがこんな攻撃を食らえば、それこそひとたまりもなかっただろう。

「気付きましたか？ あなた達が仲良くおしゃべりしている間に、辺りにいくつか罠を仕掛けさせてもらいましたよ。あなたはもう一歩も動くことはできない」

罠。恐らく、見えないかんしゃく玉のような物がそこら中に浮い

ているのだろう。先ほどの一撃は自身に展開した防壁で防ぐことができたが、この防壁も無限に働くわけではない。不用意に動いて罠に触れてしまえば数発分で砕け散ってしまう。

だが、こんな子供だましなど。

「お前の言葉を借りるなら……俺には、余裕を持つ理由がある」

言い終わると同時にレンは一言呪文を唱え、遙か上空に座標転移する。だがそこから重力の赴くまま自由落下するなどということはなく、眩い白光を放つレンの身体は当たり前のように静止した。

「さすがにこんなところまでは仕掛けていないだろう？」

不敵に笑うレンの目の前に、より一層の怒りを纏わせたノイズが同じく座標転移を行った。なるほど、宙を飛ぶくらいだったらこの三流魔王にもできて当然と言ったところか。

もはや返答は無かった。ノイズは素早く爪を振るい、ついでにそこから生じる『音』で二重の攻撃を仕掛けてくる。

魔王の本気にたじろぐこともなく、レンは座標転移を繰り返してその攻撃を捌き、自身も術式を展開させて反撃を加えていった。

レンによって光を奪われたミラの街。それとは反対に訪れた満天の星空をバツクに、白光が瞬いては消えていく。

常軌を逸したが戦いがゆえに、その光景は美しくすらあった。

(……………なんだ?)

数十回に及ぶ瞬きの果て、レンは奇妙な感覚に襲われた。

頭の中で展開させた座標転移の術式を発動させることができない。

いやそれどころか　口は動かせるのに、声が出ない。

「ク……ハッ！　ハハハハハ！　私が仕掛けた罠。一つだけと言った覚えはありませんよ！」

本当に可笑しくてたまらない、という風にノイズは片手で顔面を覆い、天を仰いで爛に触る大笑いを続ける。

「あなたの周囲の音を“支配”しました。もはやあなたは衣擦れの音ひとつ立てることはできない。つまり術を発動させるためのトリガー・ワードを唱えることができないのですよ！」

確かに、いかに頭の中で展開する術式を簡略化したところで発動の際のトリガーは必要だ。しかしまあ、なんというべきか。人生どこで何が役に立つかわからない。

「こんな空中では攻撃を避けることもできないでしょう。なに、楽に殺してあげるから安心してください。あなたが現世に蘇った私の栄えある犠牲者、その第一号です！」

口の端を不気味に歪め迫ってくるノイズを目の前にしながら、レンはゆっくりと腰のホルスターから二丁の拳銃を抜き取り、しっかりと両手に構え、ノイズに向かって交互に打ち続ける。

弾切れのはずのシリンダーには、レンを纏う白光と同じ光が絶え間なく流れ続け、撃つと同時に勢いよく回転していった。

一発。二発。三発。止むことは無い銃声はいつまでも続き、ノイズの身体はあつという間に無数の魔方陣で覆われていく。

今やこの銃に弾数制限などという縛りは無く、どんな魔術でも思いのままに行使用することができる。

だとすれば、手加減も、出し惜しみも必要ない。

無数の魔方陣から放たれた淡い光が、瞬く間にノイズの身体を覆いつくしていった。

「これは……！？ そんな」

ノイズが驚愕で塗り固められた表情と共に発した言葉は、最後まで紡がれること無く霧散していく……その身体と一緒に。

レンが放った術は、『情報消去』。マコトに施した情報復元とは全くの逆の、あるべきものをこの世から消す魔術。

全身に浴びれば、いかな魔王でも抵抗する術は存在しなかった。

一滴の血すら残すこと無く、かつてこの地を荒らしまわり、封印された魔王は消去された。

「悪いな。断末魔ぐらい聞いてやるべきだったか？」

音の支配から解き放たれたレンは、もはや応える相手のいない問いを呟いた。

\*

「すごい……」

レンの用意してくれた防壁の中で、じつとうずくまりながら一部始終を見ていたマコトは、それだけ呟くのがやっとだった。

これが英雄の力。しかも、単体での。

だとすれば、二人の英雄が力をあわせた挙句に破れた“暁の魔王”とは一体どんな力を持つというのだろうか？

この戦いだけでも完全に理解の範疇を超えているマコトには、とても想像できない話だった。

やがて、空中に浮かんでいた英雄はゆっくりと地面に降り立ってくる。

「あ、グレ……じゃなかった。レン！」

諸々の話を聞くために近寄ろうとしたマコトは、レンの身体に起きた“異変”に驚いて思わず尻餅をついた。

地面に降り立ったレンの身体から、目を覆う程の閃光が溢れ出したのである。

一瞬マコトの視界を完全な白で染めたその光は、収まると同時にミラの街に吸い込まれるように戻っていった。

今や大都会・ミラは完全に元の姿を取り戻している。何も知らない一般市民はこの数分をただの停電だったと思うだろう。

この時初めて、マコトはグレイが『夜』にこだわっていた理由に気付いた。

『グレイ』が『レン』に成り代わる　いや、戻るには大量のエネルギーをその身に取り込む必要があったのだ。

そのためには、人々が明かりを求めて電力を使う夜を待つ必要があった。そういうことだろう。

「マコト。怪我は無いか？」

元の灰色髪に戻った『グレイ』が、マコトを見るなりそう言った。「あんたに治してもらったお陰で、すこぶる快調よ。……今はなん

て呼べばいいのかしらね」

「今はグレイで頼む。本名が広まっては困るんでな」

「わかったわ。……ちょっと、どうしたの？」

突然右手を側の建物につき、肩膝を折るグレイにマコトは心配そうな声をかける。

「すまない。エンプティーだ」

力無い声で応えたグレイは、言い終わると同時に石畳の地面へと倒れ付した。

「あ……おはよう」

いつまで経っても起きる気配の無いグレイを覗き込んでいたマコトは、突然目を覚ましたグレイと目が合ってしまった、わけも無く気恥ずかしさを覚えた。

「ここは？」

起き抜けにもかかわらず、しっかりと意思のある声でグレイは問う。

「あんたと私がお互い名乗りあった丘よ。あの戦い、見てた人もいたみたいでなんだか辺りが騒がしくなってきたから、ここまで運んできたの。大変だったんだから、感謝してよね？」

「ああ。ありがとう。だがまるつきり昨日と立場が逆になってしまったな」

迷うことなく感謝を述べるグレイ。その素直さに感服しながらも、マコトはグレイの言葉に何か趣き深いものを感じていた。

立場が逆。まさにその通りだ。

つくづく面白い関係であると言わざる得ない。出会ったのがつい昨日であることも含めて。

「……言われてみれば、そうかもね。でもまあそれは置いておいて。約束、覚えてるでしょ？」

上半身を起こしたグレイの瞳を真っ直ぐに見つめながら、マコトは問う。

「もちろん。全部話してやるよ」

グレイは先ほど話をはぐらかした時とは違い、マコトをしっかりと見据えながらゆっくりと語り始める。

「俺の正体には気付いているな？ お察しの通り、俺はかつて『英雄』と呼ばれた者だ。だが、世間一般に言われるように自主的に立ち上がって“暁の魔王”を封印しにいったわけじゃない」

グレイの語りを邪魔立てすることなく、マコトは食い入るように話を聞き続ける。

「国に命令されたのさ。まあ、元から俺ともう一人の『英雄』はそういう役割を担ってただけだな。国に命じられて、秘密裏に事を処理する。何度も似たようなことをしてきたし、今回もそういう任務の筈だった」

「神出鬼没な“暁の魔王”の出現位置をなぜか国が正確に把握していた時点で怪しむべきだったのかもしれないが……畏だったんだ。国はあの魔王の力が俺達より遥かに上だということを知っていた。倒せないとわかった上で、あらかじめ設置してあった封印術式を発動させるための罠にしたってわけさ」

「どういうこと？ 国があんたみたいな『英雄』を手放すなんて、損以外に何もないじゃない」

頭に沸いた疑問をそのままぶつける。自分が国王だったなら、そんな暴挙を犯さないだろう。

「色んな奴に言われたけどな、俺達は“過ぎたる力”を持っていたんだよ。国からしてみれば、一個人にこんな力を保有されたのでは溜まったものではない。どうにか処分しなければ　そういう具合さ」

マコトはようやく合点がいった。“暁の魔王”という災厄を沈静化させると同時に、不安要素を国から消し去る。それが国の狙いだっただけというわけだ。考えてみれば、“国家による束縛”を敗北によ

って失った後、そのような人物が野放しにされるのは大いにリスクが伴うと言えなくもない。『英雄』が寝返らない保障はどこにもないのだ。

「ともかく、俺はそこでかつての力を失った。ベッドの上で目覚めた時は冗談じゃなく死のうと思つたよ。おまけに自分は死んだことになつてるし、秘密保持だとかで一生涯幽閉と宣告されちゃあな」

軽い調子で言っているが、並の絶望ではなかったことだろう。全てを失った男の苦悩を理解するには、マコトはあまりにも若すぎた。「……ん？」

グレイの発言を頭の中で整理してから、マコトは気付く。

「ちよつと待つてよ。それじゃあなんでわざわざ“暁の魔王”を封印から解き放つのか説明されてないじゃない。まさか国への腹いせとか言っんじやないでしょうね？」

ややトーンを落とした声で、マコトはグレイに詰め寄る。もし本当にそういう理由だったらぶん殴つて小一時間説教してやろう。

「理由は簡単さ。一緒に封印されちまつたんだよ。もう一人の英雄

……剣姫、ミリア・アララギがな」

さつき、『レン』が言つた言葉を思い出す。「俺の、お姫様」

マコトの中で、すべてはつながつた。

「情けないことだがな。あいつには言い足りないことが山ほどあつた。それを……死んだわけでもないのに、全部ひっくりくるめて諦めるなんてことはできなかつたのさ。我ながら 馬鹿だとは思つが」最後の言葉を紡ぐとき、グレイはわずかに目を逸らしていた。まるで、言いよりの無い後ろめたさを抱えているかのように。

一体、この男はどんな胸中でこの八年間を生きてきたというのだろうか？

ノイズが封印されていた部屋で語つた言葉の意味を、マコトは初めて理解した。いや、「理解」と呼ぶには浅すぎたかもしれない。

マコトがグレイの真意を完全に理解できないのは、若いからか、女であるからか 恐らく、その両方だ。

「あとは簡単さ。幽閉施設を抜け出して、戦える術を探して、封印の解き方を探して。今に至る、と」

「しかし……考えようによっちゃ壮大なラブ・ストーリーよね。ある種見事だわ」

「言われてみれば、そうかもしれないな」

「恥ずかし気もなく微笑するグレイを見て、マコトは「ああ、これが大人か……」と場違いな納得をした。

「それにしても、ここで“魔王が封印から解かれる様”を見れたことはある意味幸運だった。お陰でこれからの行動指針が立ちやすくなったからな。マコトには感謝してるよ」

それを聞いて、マコトは思わず頬を朱に染め後頭部をぼりぼりとかく。自分がしたことはただの手伝いだったのだが、感謝されればそれなりに嬉しくもなる。

「で、だ。唐突に感じるかもしれないが、俺からもひとつ聞きたいことがある。聞いてくれるか？」

「予想だにしないグレイの物言いに、多少動揺しながらもマコトは同意した。

「この二日間でわかったと思うが、俺は一人で行動するには色々制限がある。“暁の魔王”を封印から解く術を見つけても、仲間がいなければまともな戦うことすらできないだろう。だから」

「一拍置いて、大きく息を吸ったグレイは、なぜか柄にも無く緊張しているように見えた。

「マコト、お前について来てほしいんだ。元より、俺の旅の目的の一つが『信頼できる仲間を探すこと』だったからな。お前は強い。信頼もできる。無理には言わないが……頼めないか？」

「マコトはまさしく仰天した。こんなところまで昨日と同じにしないでいいだろう。」

「一瞬間談なのではないかと疑ってみたが、グレイの顔はどの角度から見ても真剣そのもので、からかっている様子など微塵も無い。

本気で連れて行くつもりだ。」

だが何より困るのは、自分が“ついでいきたい”と思ってしまう  
ていることだった。

恐らく、グレイが言い出さなければ自分で言っていたのではない  
だろうか。……正直に言おう。自分はこの男に興味がある。

他に行く宛がないだとか、一つ所に留まれないとか　そういう  
理由とは関係なしに、この申し出に惹かれてしまう。

だから、困るのだ。

「……………」

いつも何かしら喋り散らしているマコトからは想像できない沈黙。  
背後でゆっくりと立ち上つていく朝日だけが、俯いたマコトの表情  
に影を入れ、その様相に変化を入れていった。

「そんなこと、こんなにいきなり言う？　フツー」  
相変わらず俯き加減のまま、マコトはそれだけ呟いた。

「ここで言わなかったら、もう会うことはないだろうからな。それ  
に断られても後悔はしないさ。でなければ、こんな昔話なんてでき  
ないだろう？」

確かに、先ほどの話はグレイの自分に寄せる『信頼』の何よりの  
証だったのだろう。

では、自分もそれに答えなければいけないのではないか？  
迷う必要なんて、ないじゃないか。

「わかったわよ。ついていこうじゃない！　こうなったらあなたに  
は私のサクセス・ストーリー、その最重要人物を担ってもらおうわ！  
私の類まれなる文才で、国の陰謀と英雄の復活を華々しく彩つて  
あげようじゃないの！」

さっきまでの沈黙はどこへやら。マコトは太陽のように輝く笑み  
を携えて、グレイをびしつと指差した。

「いくらでも担おうじゃないか。だが、本当にいいの？」

「自分で言い出しといて何言ってるのよ。気が変わらないうちに契  
約書にでも何でもサインさせておいたほうがいいわよ？　私はあな  
たが考えているより安くないんだから。けど……そうね。なら、私

にも条件を出させてもらおうわ」

マコトは顎に人差し指を当てて、考える仕草をする。

そうだ。自分にも、この『英雄』にやってもらいたいことがあったじゃないか。

「私がここにいるのにも色々と事情があるの。……あ、家出だとか言うのは忘れて頂戴。ウソだから。たぶん、いつか私はやらなきゃいけないことができるわ。今はそれを先延ばしにしてるけど、逃れられないのよ。その時が来たら、あなたにも手伝ってもらおう。どう？」

我ながら、いい申し出に思えた。これで立場はイーブンになるし、今まで考えてもみないことだったが、この男がいれば、自分の運命だって変わってくれるかもしれない。

それを聞いたグレイも、別段驚いた様子は見せず、むしろ晴れやかな顔すら見せていた。どうやら元よりタダでついてきてもらおうとは考えていなかったらしい。

「そのほうが俺としても貸し借りを考えなくて済んで気が楽だ。願っても無いさ」

笑顔を湛えて肯定したグレイに、マコトも柔和に微笑み返す。

「決まりね。よろしくっ！」

昨日とは逆にマコトのほうから差し出した手を、グレイはしっかりと握り返す。

気が付けば、眼下に見下ろすミラの街はすっかり昇った朝日に照らされて神秘的な色合いを見せていた。

この出会いが、『英雄』の夜を明かすための契機となるかどうか。それはまだわからないが

少なくともこの長かった夜は明け、世界には朝が訪れていた。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8759b/>

---

灰になった英雄

2008年11月7日09時16分発行